

岩田正美「社会的排除 - 参加の欠如・不確かな帰属 - 」有斐閣（2008）

今年の正月は、日本社会では「派遣村」の話題が席卷した。「派遣村」が社会に提起した課題は少なくないが、特に、衝撃的であったことは、「派遣切り」や有期雇用者の雇い止めといった職の喪失が、住居の喪失（ホームレス）に容易に直結するという事態であり、そのような人々が大量に生み出されたことであったと思う。

日本における貧困研究のフロントランナーである著者は、本書において、1999年の都内路上生活者の職業歴と住居歴を辿る経路分析から、「ホームレス」に至る3つのルートを析出している。第1は、最長職は安定し、普通住宅に住んでいた人が急に路上に出現するケース（転落型：35%）、第2は、最長職は安定したが、最長職の時から、あるいは路上生活直前に寮など労働型住宅に住んでいた人が、その後、路上に出てきたケース（労働住宅型：29%）、第3は、最長職時から不安定職にある人のケース（長期排除型：35%）である。

この分類に従えば、派遣会社や業務請負会社から職と住が提供されていた「派遣村」の人々は、「労働住宅型」の典型といえる。著者は、「労働住宅型」や「長期排除型」がホームレスに至る背景には、このような会社（雇用主）との関係ばかりでなく、家族、学校など社会との「中途半端な接合」があることを指摘する。特に、若年層の場合は、家族との「中途半端な接合」関係の影響が大きく、それが代代的に再生産されたものであることを明らかにしている。

一方、中高年層に多い「転落型」の背景においても、倒産や失業といった雇用機会の喪失と共に、家族トラブル（離婚）、疾病、借金、人間関係の喪失など複合的な要因が一時期に集中的に起こり、社会から「引きはがされる」事実のあることを示している。社会から「引きはがされた」中高年層にとっては、生活の安定期に支払っていた雇用保険は狭隘な中高年の労働市場において十分に機能せず、積み立てた厚生年金も受給年齢までかなりの年数があり、ホームレスへの転落やそこからの脱出のためのセーフティネットとならない現実が浮かび上がってくる。

グローバリズムと脱工業化が進むなかで、個人と社会との関係は、安定雇用や地域への定住といった安定的な社会から、働き方や生き方が柔軟に選べる可能性が高まる反面、社会からの「引きはがし」や社会との「中途半端な接合」が発生しやすい流動化（不安定化）した社会へと変容している。

日本社会においては、「ホームレス」に端的に示される社会的な排除、参加の欠如に対して、生活保護といった福祉よりも職業訓練、職業紹介などによる労働参加を通じた短期間による社会的な包摂を目指す施策が展開されている。しかしながら、景気の拡大局面においても就労機会が稀少であった中高年失業者にとっては、不況時における就労支援による再チャレンジには一層の困難が付きまとうことも事実といえよう。著者は、「ホームレス」という究極の「定点」を失うプロセスの検証を通して、個人の自立に向けた施策は、就労支援ばかりでなく、その前提となり自らの帰属証明でもある「住」の確保とそれをも加味した生活支援、さらには、「資産形成」の確保など重層的で積極的な施策の展開が不可欠であることを示している。

冒頭で述べた「派遣村」問題は、社会との「中途半端な接合」状態にある人々が、社会にしっかりと参加するツールとしての「労働組合」の有効性を示していることにも触れておこう。（井出久章）